

目的 前編と同様である。

方法 前編と同様である。

結果 (4)住生活志向；親との同居時の各住生活に対する共同・分離への志向をみると、「夕食」や「だんらん」では共同志向が、「就寝」では分離志向が高い。また女子学生よりやや低率ながら親子同居時の住生活のコミュニケーション・プライバシーの生活統制意識は高いと言える。更に食事行為の共同志向をプロセス別に把握すると、「同献立同食」志向は「別献立同食」の倍に達し、女子学生より完全同食への志向は強い。(5)同居規定要因；親子同居を規定する最大の要因として、「嫁姑の相性」(17.9%)、「親の健康」(17.9%)、「自分達の経済力」(17.0%)が挙げられ、女子学生の反応と類似している。しかし3つの要因の構成比がほぼ均衡している点は特徴的である。また親との同居に大いに影響を与えると思われる要因として、「住宅の広さ・設備」(約67%)を指摘する者が最も多く、女子学生と共通している。(6)結論；今回は既報に続き、親との同居意識を男子大学生を対象に考察した。その結果次の結論を得た。①男子学生の高齢化問題への認識は、女子学生のそれより幾分高いものの類似している。②男子学生は女子学生より本質的には同居に対し許容性が高い。③同居の規定要因に関しても、男女学生に類似した反応がみられるものの、男子学生は、精神面・意識面の要因を女子学生ほど重視していない。④特に、今回までの一連の研究で明らかにした如く、同居時の住生活の共同・分離のあり方や、認識については男女差、年齢差、住み方の差を越えた共通の意識特性が存在する等である。